

イヨネスコ戯曲全集 1 (全4巻)

定価 九五〇円

一九六九年五月一〇日印刷
一九六九年五月二〇日発行

訳者 ①

諏訪 安堂 木村 塩瀬 篠原 大宮 石沢 佐藤 藤信
正也 一宏 夫臣 郎二 秀太 輝保 庸太 秀信 貞之

発行者 草野 中昭三

印刷者 田中 昭三

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(三)七八二(代)

振替東京 三三二二八

郵便番号一〇一

理想社印刷・松岳社製本

イヨネスコ戯曲全集

1

Titre : ŒUVRE THÉÂTRALE IONESCO, tome 1

La cantatrice chauve (THÉÂTRE I, 1954)

La leçon (THÉÂTRE I, © 1954)

Jacques ou la soumission (THÉÂTRE I, 1954)

Les salutations (THÉÂTRE III, © 1963)

Les chaises (THÉÂTRE I, © 1954)

Le maître (THÉÂTRE II, 1958)

*L'avenir est dans les œufs ou il faut de tout
pour faire un monde* (THÉÂTRE II, © 1958)

Victimes du devoir (THÉÂTRE I, 1954)

La jeune fille à marier (THÉÂTRE II, © 1958)

Auteur : Eugène IONESCO

© Éditions Gallimard.

Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha.

イヨネスコ戯曲全集

ONE

禿の女歌手
授産
ソク、あるいは降参
ごあいさつ
梅
先生

未来は卵の中に
義務の犠牲者
花嫁候補

CANTA

白水社

LECON

目次

禿の女歌手	7
授業	47
ジャック、あるいは降参	83
ごあいさつ	125
椅子	133
先生	187
未来は卵の中に	201
義務の犠牲者	231
花嫁候補	285
解説(石沢秀二)	297

諏訪 正 訳

禿の女歌手
反^{アン}戯^チ曲^{キョク}

LA CANTATRICE CHAUVÉ
Éditions Gallimard, 1954.

人物

スミス氏

スミス夫人

マーチン氏

マーチン夫人

メアリー

女中

消防署長

第一場

英国の中流家庭の室内。英国の肘掛け椅子がある。
英国の夕暮れ。英国の肘掛け椅子の一つにかけた英国人のスミス氏は、英国の炬燵で、英国のスリッパをはき、英国のパイプをくゆらせ、英国の新聞を読んでいる。彼は英国の眼鏡をかけ、半白の、小さな英国の口ひげをたくわえている。かたわらの、別の英国の肘掛け椅子には、英国人のスミス夫人。英国の靴下くつしたをかがっている。長い英国の沈黙。英国の時計が英国の十七時を打つ。

スミス夫人 まあ、九時。晩のお食事は、スープにお魚にポテトのフライに英国のサラダ。子供たちは英国のお水を飲んだわ。みんな、ほんとによく食べた。だってあたしたち、ロンドンの郊外に住んでいて、スミスってうな名まえですからね。

スミス氏（新聞を読み続けながら、舌を鳴らす）
スミス夫人 ポテトはとてもよく揚がってたし、サラダ・

オイルも悪くなかった。角のお店のサラダ・オイルは、お向かいのより上等。坂下のお店のでさえ、かなわないわ。といって、よそのお店のがどれもこれも悪いって言うわけじゃないけど。

スミス氏（読み続けながら、舌を鳴らす）

スミス夫人 けれど、いちばんいいサラダ・オイルはやはり角のお店の……

スミス氏（読み続けながら、舌を鳴らす）

スミス夫人 メアリイは今晚、ポテトの揚げ方がじょうず。この前のときはへた。よく揚がってないと、好きじゃないの、あたし。

スミス氏（読み続けながら、舌を鳴らす）

スミス夫人 お魚は生きがよかった。ほったが落ちそう。二度もおかわりをしてしまった。いいえ、三度も。

おかげで、おトイレがよい。あなたも三度おかわりなさったわね。でも三度目は、前の二回ほど召し上がらなかった。あたしは、前よりよけい食べてしまったわ。今晚、あたしのほうがいたいたわね。どうしてかしら？いつも、あなたのほうが召し上がる。食欲がなかったわけでもないのにね。

スミス氏（舌を鳴らす）

スミス夫人 けど、スープは少しお塩がききすぎてたみたい。塩辛かったでしょう、あなたには。ねええ。それに、ニラが多すぎたし、タマネギが少なすぎた。シキミの実を少し入れるようにメアリイに言っとけばよかったわ。この次は、あたしがじょうずに作りますからね。

スミス氏（読み続けながら、舌を鳴らす）

スミス夫人 坊やったら、とてもビールを飲みたそうな顔をしてた。あの子、いまに大食いになるわ。あなた似ね。お酒のびんにずっと目をつけてたの、気がついたでしょ？ でもあたし、コップに水をついでやった。のどが渇いてたとみえて、飲んでしまったわ。ヘレンはあたし似。世帯持ちもうまいし、やりくりもじょうず、ピアニもひける。英国のビールを飲みたいなんてけっして言わない。ちびそっくりね。あの娘は、飲み物はミルク、食べ物はおートミールだけ。もっともまだ二つなんですものね。名まえはベギー。

マルメロとインゲン豆のパイ、あれはすてきだった。デザートに、オーストラリアのブドー酒でも一杯いただければ、申し分なしというところだけど、お酒はテーブルに出しませんでした。子供たちに牛飲馬食のいけななお手本を見せるのはよくありませんからね。万事、ほどほ

どにして暮らすことを教えないと。

スミス氏 (読み続けながら、舌を鳴らす)

スミス夫人 パーカーさんの奥さんがね、ブルガリアの食料品屋をご存じなの。ポポシエフ・ローゼンフェルドといつて、コンスタンチノープルから来たばかりの人。ヨーグルトの専門家なのよ。アンドリノープルのヨーグルト学校を出たんです。あした、本場のブルガリア・ヨーグルトを、大鍋で買いいいこうと思うの。ロンドンの郊外じゃ、めったに手にはいるものじゃありませんからね。

スミス氏 (読み続けながら、舌を鳴らす)

スミス夫人 ヨーグルトは、胃や腎臓や盲腸や妄想にいいの。お隣のジョーンズさんのお子さんが診てもらってるマッケンジー・キング先生がそうおっしゃったわ。そりゃいい先生。とても信用がおけるの。自分で実験してみた薬しか勧めないの。パーカーさんの手術のときだって、まずご自分の肝臓を手術なさったのですもの、少しも悪くなかったのに。

スミス氏 だがどうしてその先生が直って、パーカーさんが亡くなったのだね？

スミス夫人 先生は手術に成功したけど、パーカーさんが

成功しなかったからよ。

スミス氏 じゃあマッケンジーはいい医者じゃない。手術というものは、二人とも成功するか、さもなければ二人とも死んでしまうか、どちらかじゃなければならぬはずだ。

スミス夫人 どうして？

スミス氏 良心的な医者は、患者ともども助からないとき、そろって死んでしまわねばならん。船長は船もろとも波にまかれて死ぬ。生き残ったりしない。

スミス夫人 患者と船をいっしょにすることはできないわ。

スミス氏 できるとも。船には船の病氣がある。しかし、その医者は船同様健康である。ゆえに医者が患者とともに死ぬのは、船長が船とともに死ぬのと同じである。

スミス夫人 まあ！ 思ってもみなかった。……きつとそうね……で、だからどうだっていうの？

スミス氏 つまり医者という医者は残らずいかさま師だということさ。患者だって同じこと。英国でまっとうなのは海軍だけだ。

スミス夫人 でも船乗りは違うわ。

スミス氏 もちろんだ。

間。

スミス氏 (相変わらず新聞から目を放さずに) どうもわからん。新聞の社会面になぜいつも死んだものの年齢を出し、生まれたものの年齢を出さないのか？ ナンセンスだな、これは。

スミス夫人 思ってもみなかったわ！

ふたたび沈黙。時計が七度鳴る。沈黙。時計が三度鳴る。沈黙。時計はぜんぜん鳴らない。

スミス氏 (相変わらず新聞から目を放さず) おやおや、ボビー・ワトソンが死んだとき。

スミス夫人 まあ、気の毒に。いつ亡くなったのかしら？ スミス氏 どうした、そんなにびっくりしたふりをして？ 知ってるじゃないか、二年前に死んだ。覚えてるだろう、葬式に出たじゃないか。一年半になる。

スミス夫人 そりゃ覚えてますとも。すぐ思い出したわ。でも、新聞を見て、あなたがなぜあんなにぎょっとした

かわからないわ。

スミス氏 新聞に出てたのじゃない。あいつが死んだという話したのは三年前のことだ。今もののはずみでひょいと思ひ出したんだ！

スミス夫人 まあまあ！ 物覚えのいいこと。

スミス氏 大英帝国のもっともみごとな屍体だった！ 年齢には見えなかったな。気の毒なボビー。四年前に死んだが、まだ体温は残っていた。息をしているような屍体だった。それに陽気なやつだったな！

スミス夫人 かわいそうな女でしたよ、ボビーって人は。

スミス氏 かわいそうな《男》だろう。

スミス夫人 いいえ、あの人の奥さんのこと。奥さんも、だんなさんと同じボビーっていう名まえ。ボビー・ワトソンっていう。二人とも同じ名まえだったもので、いっしょのときには、どちらか一人を呼ぶことはできなかったわ。だんなさんが亡くなってやっとな、どっちの話をしているのか区別がついた。けど、近ごろまた、亡くなっただんなさんと奥さんをごっちゃにする人が出てきて、奥さんにお悔やみを言ったりしてるわ。あなた、奥さんご存じ？

スミス氏 ボビーのお弔いのとき、たまたま一度顔を合

せたことがある。

スミス夫人 あたし、一度も会ったことないわ。おきれいな
なかつた？

スミス氏 整った目鼻だちだが、美人とは言いかねる。とても大柄で、がんじょうな女だ。目鼻だちは整っていないが、まれにみる美人と言えるだろう。とても小柄で、きゃしゃな女だ。歌の先生なんだよ。

時計が五度打つ。長い間。

スミス夫人 いつ結婚するつもりなのかしら、お二人？

スミス氏 おそくとも、来年の春さ。

スミス夫人 やはり結婚式には行かないとね。

スミス氏 贈り物もせにやなるまい。さて、なににしたものか？

スミス夫人 結婚式のときいただいた銀のお皿さきのセットね、あの七つの中から一皿あげてはいけなかしら、なんの役にもたないんですもの。

短い沈黙。時計が二度鳴る。

スミス夫人 あんなに若いのに、寡婦ごふ暮らしを続けるなんて気の毒にね。

スミス氏 子供がないのが、せめてもだ。

スミス夫人 ないどころですか！ かわいそうに何人生んだことか！

スミス氏 まだ若い。すぐ再婚できるさ。喪服を着るとひきたつもんだ。

スミス夫人 でも、子供たちはだれがめんどうみるのかしら？ ご存じでしょ、男の子が一人に女の子が一人いるの。名まえはなんていったかしら。

スミス氏 ボビーにボビー、両親と同じさ。ボビー・ワトソンのおじさん、つまりボビー・ワトソンじいさんは金持ちだし、子供好きだ。喜んでボビーの教育を引き受けるよ。

スミス夫人 そりゃそうね。それにボビー・ワトソンのおばさん、つまりボビー・ワトソンばあさんだって喜んでボビー・ワトソン、つまりボビー・ワトソンの娘の教育を引き受けるでしょう。こうなれば、ボビー・ワトソンのお母さん、つまりボビーだって再婚できるわけ。だれかお目あての人、いるのかしら？

スミス氏 いるとも。ボビー・ワトソンのいところだ。

スミス夫人 だあれ？ ポビー・ワトソンのこと？

スミス氏 どのポビー・ワトソン？

スミス夫人 死んだポビー・ワトソンのもう一人のおじさんのポビー・ワトソンじいさんの息子のポビー・ワトソンのこと。

スミス氏 いや、そいつじゃない。別なやつだ。死んだポビー・ワトソンのおばさんのポビー・ワトソンばあさんの息子のポビー・ワトソンだ。

スミス夫人 セールスマンのポビー・ワトソンのことね。

スミス氏 どのポビー・ワトソンもみんなセールスマンだ。

スミス夫人 たいへんな商売ね！ でも、いいもうけになるんですってね。

スミス氏 そう、競争相手がいないければね。

スミス夫人 競争相手のいないのはいい？

スミス氏 火曜と木曜と火曜だ。

スミス夫人 まあ！ 一週間に三日も？ その日、ポビー・ワトソンはなにをするの？

スミス氏 休んで、寝ている。

スミス夫人 その三日間競争相手がいないのに、なぜ働かないのかしら？

スミス氏 いちいちそんなこと知るもんか。おまえのばかげた質問には答えられん！

スミス夫人 (むっとして) あたしをばかにする気？

スミス氏 (にっこりして) とんでもない。

スミス夫人 男ってみんな同じ！ 一日じゅうどんでんとして、タバコをくわえてる。さもなきや、一日に五十回もおしろいをはいたり、口を直したり。じゃなきや、一日じゅう酒びたり！

スミス氏 男が女みたいなまねをして、一日じゅうタバコをすい、おしろいをぬり、口紅をつけ、ウイスキーを飲んでるのを見たら、なんって言うつもりだ。

スミス夫人 あたしは、ちっともかまわないわ！ でも、そんなことを言って、あたしをばかにしようっていう気なら、いいこと……あたしはね、そんな冗談、大きらい。わかってるわね！

彼女は靴下を遠くにほうり投げ、歯をむいてくっつき、立ち上がる。

スミス氏 (やはり立ち上がり、いそいそと妻に近寄る) おやおや！ どうしてそんなにおかんむりなのさ！ わ

かつてるだろう、冗談さ！（抱きかかえて接吻する）
なんて滑稽な年寄り夫婦だろうね！ さあ、明かりを消して、おねんねしよう！

第二場 同じ人物、メアリイ

メアリイ（登場して） わたくしは女中です。とても楽しい午後を過ごしてまいりました。男の人と映画館に行き、おぜいの女の人たちと映画を見ました。それから、ブランデーとミルクを飲みに出かけ、そのあとで新聞を読みました。

スミス夫人 そう思ってたわ、あなたが楽しい午後を過ごし、男の人と映画に行つて、ブランデーとミルクを飲むだろうって。

スミス氏 それから新聞！

メアリイ お客さまのマーチンご夫妻がお見えです。わたくしを待つてらっしゃいます。かつてにおはいりになろうとはなさいません。今晚、ごいっしょにお食事のほずでございましたわね。

スミス夫人 ええ、そう。お待ちしてたのよ。でもおなか

がすいたし、おいでにならないようなので、先にはじめてしまったの。一日じゅう、なにも食べなかったのよ！
もの。おまえ、外出してはいけなかったのよ！

メアリイ 奥さまがお許しをくださったのですわ。

スミス氏 出したくて出したわけじゃない！

メアリイ（笑いだす。それからすすり泣く。そして微笑する） わたくし、尿瓶おまるを買いにいったんですの。

スミス夫人 さあさ、メアリイ、ドアをあけてマーチンさんをお通ししてね。あたしたち、すぐ着替えてきますからね。

スミス夫妻、上手から退場。メアリイが下手のドアをあけると、マーチン夫妻が登場。

第三場 メアリイ、マーチン夫妻

メアリイ なぜこんなにおそくなりました！ エチケットをご存じありませんね。時間を守らないといけません。わかりましたか？ とにかくおかけになって。ではお待ちを。（退場する）